

# びん がた 紅型ができるまで

TNM 東京国立博物館  
TOKYO NATIONAL MUSEUM



展示期間 令和4年4月5日(火)～

展示場所 東京国立博物館 本館19室

東京藝術大学大学院インターンとの共同研究として、沖縄の<sup>びん がた</sup>紅型をテーマに、作品の工程見本を制作しました。

紅型の複雑な模様構成や鮮やかな色彩には、19世紀の沖縄・琉球王朝時代に花開いた染色技術の粋が尽くされています。今回の展示では、染め出す技術や、色彩豊かな紅型をはぐくんだ文化とはどのようなものであったのかという疑問に、復元制作を通して迫ります。

制作にあたり、「城間びんがた工房」への取材を行い、技法の指針を得ました。色彩は伝統的な材料の入手が難しいため、現在手に入る材料を用いて復元制作に挑戦しています。

この展示を通して、人の手が生み出す技の美を身近に感じていただければ幸いです。

制作：平成28・29年度東京藝術大学大学院インターン

紅型制作 山田麻緒 大小田万侑子 デザイン 内山耀一郎 進行 玉井あや 月村紀乃(敬称略)

## 紅型とは

紅型の名称については、「紅(びん)」が色を、「型(かた)」が模様を意味する、という説があります。鮮やかな色彩と、型紙や糊の線で描き表した図様が特徴です。王家から庶民まで、琉球に暮らす人々が紅型を日常着として扱っていたことが近年判明しています。

17世紀後半には制作技法が存在していたと言われていたのですが、歴史的な記録が少ないためその実態は明らかではありません。またその後も、琉球王国の解体、米軍侵攻による戦禍など、幾度も存亡の危機に見舞われてきました。

それでも今日まで存続できたのは、紅型三宗家のうちの城間家、知念家を中心とする活動や、民藝運動をはじめ本土の研究者らによる評価があつてのことです。現在紅型は沖縄県の無形文化財に指定され、沖縄を象徴する工芸品として広く内外に親しまれています。



原品「ウフソデジン(白地牡丹模様紅型)」 第二尚氏時代 19世紀

※令和5年3月14日～4月30日に本館16室で展示予定です。

## 工程

# 1

### かた ほり 型彫

型紙を彫る

布幅と同じ横幅の柿渋を塗った和紙を、専用の彫刻刀で彫っていきます（写真1）。

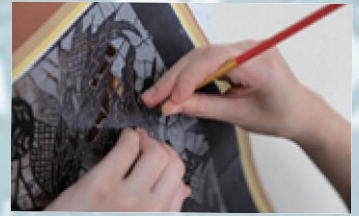


写真1

# 2

### かた おき 型置

布に防染糊を置く

工程1で作成した型紙を布の上に置きます。この上からもち米、糠、塩で作った糊を、型紙の上からヘラで均一にならしていきます（写真2）。



写真2

# 3

### いろ さ 色差し

布を染める

顔料のにじみ防止のため、ごじる豆汁（水でふやかした大豆を絞った液体）を布の両面に塗り、下準備をします。完全に乾く前に、顔料と豆汁を混ぜたものを毛足の短い刷毛で、薄い色から刷り込むように塗っていきます（写真3）。

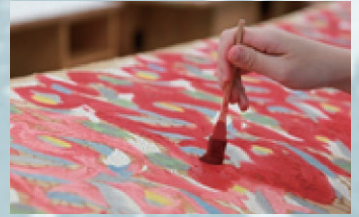


写真3

# 4

### くま どり 隈取

「ぼかし」をつくる

濃い色から薄い色へ徐々に色を変化させる「ぼかし」と言われる技法を使います。工程3で薄い色を差し、それが乾く前に濃い色をほんの少しだけ筆にとって塗ります（写真4）。「ぼかし」によって立体感が生まれます（写真5）。



写真4

写真5

# 5

### む 蒸し

顔料を布に定着させる

蒸気庫の中で1時間ほど蒸すことで、繊維が開き顔料がその隙間に入っていきます（写真6）。これにより、色ムラや色落ちが生じにくくなります。



写真6

# 6

### みず もと 水元

糊を洗い流す

水の中に布を浸し、糊をふやかします。その後、水中で布を対角に軽く引き合いながら、糊を浮かせて取り除いていきます（写真7）。糊をすべて洗い流し、乾燥させて出来上がりです。



写真7

## 紅型の模様

紅型に施される模様の多くは動植物をモチーフとしており、琉球以外の地域に起源を持っています。それは、琉球王国が交易の中継地として栄え、東アジアのさまざまな文物のやりとりがその地で行われたことに由来します。たとえば、雪をかぶった笹の模様は日本本土の、龍や鳳凰の模様は中国の工芸作品との関連を強く想起させます。

原品に染め出された牡丹の花もまた、中国発祥の吉祥模様です。牡丹は「花の王」とも称される華やかな花であることから、上流階級の衣装にふさわしいものとして受け入れられたと考えられます。

## 琉球王朝との関わり

かつては身分によって、着用できる紅型衣装の色や模様には制限がありました。たとえば地の色を黄色に染めることや、龍、鳳凰の模様を用いることは、王家の衣装にのみ許されていました。

庶民の間に普及した紅型を「那覇型」、対して、王侯貴族が着用する衣装を「首里型」と呼んでいました。原品の牡丹は、「首里型」の衣装にしばしば見られる模様で、同じ図様の類例が他にも数点確認されています。このことから原品は上流階級のために制作され、ある時期に流行した模様の可能性が高いと言えるでしょう。